

花芽（そめいよしの）の生育過程

篠原 久 男*

近年、桜の開花予想は気象台や測候所の年中行事の一つになっている。これらの開花予想に関連して、花芽（そめいよしの）の概観をとらえておく。

この場合、花芽の一生(Stage)が季節に対してどのように適応しているか、ということは多分に生態学的立場である。一方、季節対花芽の変化を対等に型付けすることを主目的とすれば、季節学らしい扱い方になるだろう。

本文における観察の対象は宇都宮市内の“そめいよしの”である。

(1) 5月中旬

花期が終ってから1カ月経った5月中旬頃、あたらしく伸びた枝の葉柄のつけねのところには、はやくも越冬芽が見られる。来春この芽が花になるか葉になるかは未定の状態である。写真は5月20日のもので、大きさは1mm×2mm程度である。越冬芽に特有のりん片もまだ十分できていない。

(2) 6月下旬

越冬芽の大きさは肥大の順調なもので3mm×1mm位になる。写真6月28日に写した。

(3) 8月上旬

写真は8月5日のものである。よく肥大したものはこの頃から花芽の資格を内部に得る。そうでないものは葉芽となる。

(4) 10月中旬

この頃になると90%位が落葉してしまうが、越冬芽は樹枝にがっちり着いて残る。写真は10月14日のもので、三角形に先の尖った上方の2つは葉芽で、下方の2つは明らかに花芽である。年によって不時開花するのはこの頃である。

(5) 12月上旬

写真は12月2日で、花芽の大きさは6mm×3mm位

である。形状・大きい時日による変化はこの頃あまり認められない。又、この頃の花芽を20℃の温室に入れても開花しないという実験結果(太田順治:花の四季)がある。ただしこれは東京でのことである。このことは春化(Vernalization)が完了していないためと、一応の解釈ができる。

(6) 1月中旬

前記(花の四季)によれば、この頃の花芽を20℃の温室に入れると、1カ月以内で開花するらしい。写真は1月11日のものである。

(7) 3月上旬

写真は3月18日のものである。今、ひとつの目安として、宇都宮の日平均気温の2月20日からの積算値(Ta)をえらぶ。Taが50℃を超える頃から、花芽の先端は一部分黄緑色となり、急にふくらんでくる。写真のものはTa=130℃である。花芽の肥大は1mm/20日の見当である。

(8) 3月中～下旬

Taが140℃を超す頃、花芽の内部は急に成長して黄色になる。花芽の肥大は2mm/10日位に及ぶ。写真は3月23日でTa=158℃になっている。

(9) 3月下～4月上旬

花芽のほうが破れて花つぼみの赤味がわずかに見えてくるのはTa=190℃あたりからである。写真は3月27日でTa=175℃であった。これはあと10日も経つと開花する状態である。

宇都宮では過去10年中9年までがTa=240~280℃で開花しており、残りの1年が221℃だった。開花頃の日平均気温は大体どの地方でも10℃位だから、この場合Taの10℃の差は1日の違いと概算される。

* Hisao Shinohara 宇都宮地方気象台
—1962年11月10日受理—